

9. 乳児の気質と児の言語発達の関連性

宮本 信也*

はじめに

気質(temperament)の研究を精力的に進めたThomasとChessによると、気質とは、何をするかではなく、どのようにするかという、行動の仕方、行動様式を指す。気質は、養育環境などの環境要因よりも、生来的な生物学的要因の関与が強いとも言われている。

一方、最近の母子関係の研究から、母親と乳児は、新生児を含め、お互いに働きかけと応答を繰り返しながら、相互の関係を作っていくことが知られてきた。

とすれば、児の行動様式に影響を与える気質が、児と周囲の人達との関係に影響を与える可能性が考えられるであろう。また、児の発達は、周囲の人との関係を含めた環境からの影響も受けるものであるので、気質が児の発達に影響を及ぼす可能性も否定できなくなる。

これまで、気質と行動・情緒面の問題との関連を取り上げた研究はみられるが、気質と発達の関連性の研究は少ないように思われる。そこで、本研究は、発達の1指標として言語発達を取り上げ、乳幼児の気質と言語発達の関連性を明らかにしようとするものである。

対 象

対象は、平成元年(1989)7月～平成3年(1991)

3月までの1年9か月間に出生し、栃木県鹿沼市の乳幼児健診(4か月, 10か月, 1歳6か月～18か月とする)の対象となった児である。

方 法

対象数が多いこともあり、質問紙を用いた調査とした。使用した調査用紙は、①乳幼児気質質問紙日本版(Carey, 1977: 佐藤らの翻訳, 1983)—乳児用(Revised Infant Temperament Questionnaire, ITQ-R)・1歳半児用(Toddler Temperament Scale, TTS), ②三国丘・桃山式言語発達検査用紙(長尾ら, 1989)の2種類である(表1)。これらの調査用紙を、健診2週間前に各家庭に郵送し、健診当日回収した。

気質に関しては、Careyの方法に基づき、今回得られた結果から平均値と標準偏差を計算し、それを用いて気質カテゴリ得点、気質類型を算出した。

言語発達については、各項目毎に「はい」を10点、「不完全」を5点、「いいえ」を0点とし、前項目の合計点を言語得点とした。さらに、言語発達状況として、以下の基準を操作的に定めた。すなわち、対象集団の言語得点平均値と標準偏差から、 $-2SD$ 未満の言語得点群を「言語発達遅滞の疑い」、 $-2SD$ から $-1SD$ 未満の得点群を「境界疑い」、 $-1SD$ 以上の得点の場合「正常(推定)」とした。

*筑波大学心身障害学系

表1 使用調査用紙の内容抜粋

1. 乳児気質質問紙日本版の一部
○目をさました時や寝入る時にぐずる。
○よその子に初めて会った時はしりごみする。
○食べたり飲んだりする間よく動く。
※「ほとんどない」～「ほとんどいつもある」まで6段階で評価
2. 三国丘・桃山式言語発達検査用紙(発語前用)の一部
○機嫌のよい時に泣き声や叫び声でない声を出す。
○あやされた時にそちらに顔を向け、ちょっとの間でも目を止める動作がみられる。
○そばにいる母親に対して自分から「ウバウバ」、「アーブゥ」など話しかけるように声を出す。
※「はい」、「不完全」、「いいえ」の3段階で評価

結 果

報告書作成の時点で、調査が終了していたのは4か月健診受診児のみで、10, 18か月健診時の調査は続行中であった。そこで、結果は4か月健診時点のものを中心とした。10か月健診以降のものは途中集計のため、今回は、参考としていくつかを示すにとどめた。

回収された調査用紙のうち、未記入項目が、気質項目では19項目以下(Careyの基準による)、言語項目では0項目のものを有効回答として、集計・検討を行った。最終対象児数とその人口学的背景を表2, 3に示した。調査用紙の回収

率は、どの健診時点でも約85%であった。

各健診時点での気質類型と言語発達状況の結果を表4, 5に示す。いずれも、結果に性差は認めなかった。なお、参考までに、4か月健診と10か月健診の双方を受診した児で、言語発達状況の経時的変化を見たところ、4か月時点で言語発達遅れ疑いの群の40%の児が、10か月時点でも遅れ疑いとなっていた。一方、4か月時

表2 最終対象児数

	回収数	有効数
4か月健診受診児	1,516	859
10か月健診受診児	1,271	999
18か月健診受診児	737	460

表3 4か月健診受診時点での最終対象児の背景

4か月健診受診児		859人				
月 齢	3か月	20人	4か月	747人	5か月	92人
性 別	男 児	439人	女 児	420人		
出 生 順 位	第1子	391人	2子	314人		
	3子	133人	4子以上	21人		
母 親 の 年 齢	10代	8人	20代	547人		
	30代	299人	40代	5人		
母 親 の 学 歴	中 学	24人	高 校	471人	専 門 学 校	144人
	短 大	113人	大 学	53人	他・未記入	54人
母 親 の 就 業 状 況	外で仕事	146人	家で仕事(含農業)	82人		
	家事のみ	631人				

表4 各健診時点での気質類型

(%)

		手のかかる子	平均的 手のかかる子	出だしの 遅い子	平均的 育てやすい子	育てやすい子
4 か 月	男児	11.8	16.2	5.9	49.9	16.2
	女児	13.6	15.5	4.8	49.3	16.9
	計	12.7	15.8	5.4	49.6	16.5
10 か 月	男児	9.5	9.5	5.2	36.1	39.7
	女児	12.2	9.5	3.8	36.0	38.5
	計	10.8	9.5	4.5	36.0	39.1
18 か 月	男児	9.9	9.1	4.3	36.6	40.1
	女児	8.3	13.2	6.6	33.3	38.6
	計	9.1	11.1	5.4	35.0	39.3

表5 各健診時点での言語発達状況 (%)

		遅れ疑い	境界疑い	正常(推定)
4 か 月	男児	3.0	11.6	85.4
	女児	2.1	11.9	85.7
	計	2.6	11.8	85.6
10 か 月	男児	2.5	16.8	80.3
	女児	1.3	14.9	83.6
	計	1.9	15.9	81.9
18 か 月	男児	0.9	6.5	92.6
	女児	0.0	3.7	96.3
	計	0.5	5.1	94.4

点で正常(推定)とされた群で、10か月時点で遅れ疑いとなっていたものは10%であった。

表6-1から6-4は、4か月健診時点での気質と言語発達の関連性を示したものである。気質類型と言語得点、言語発達状況の間に、特定の関連性は認められなかった。

一方、気質カテゴリーと言語得点の関連を見ると、統計学的有意差は認めなかったものの、

表6-1 4か月健診時点での気質類型と言語得点

	人数	言語得点
手のかかる子	109	110.1±12.3
平均的だが手のかかる子	136	110.1±13.3
出だしの遅い子	46	105.5±15.3
平均的だが育てやすい子	426	108.5±14.6
育てやすい子	142	107.3±13.6

一定の傾向がいくつか認められた。それは、「活動性の高さ」、「周期の規則性」、「反応の強さ」、「注意の持続性」、「気の散り易さ」、「敏感さ」の各カテゴリーであり、これらの気質カテゴリーの傾向が強いほど言語得点の上昇する傾向がみられた。

なお、「活動性」とは、文字どおり身体的動きの多少であり、「周期の規則性」とは、食事や排泄などの生活行動のリズムのことである。「反応の強さ」とは、外部からの働きかけに対

表6-2 4か月健診時点での気質類型と言語発達状況 (%)

	遅れ疑い	境界疑い	正常(推定)
手のかかる子	2.8	5.5	91.7
平均的だが手のかかる子	2.2	9.6	88.2
出だしの遅い子	4.3	17.4	78.3
平均的だが育てやすい子	3.1	12.2	84.5
育てやすい子	0.7	15.5	83.8

表 6-3 4 か月健診時点での気質カテゴリーと言語得点

気質カテゴリー	内 容	人数	言語得点	気質カテゴリー	内 容	人数	言語得点
活動の水準	低	109	107.9±14.2	気分の質	陽	145	112.9±11.9
	中	601	108.2±14.2		普通	573	107.8±14.1
	高	149	110.5±13.2		陰	141	107.2±14.7
周期の規則性	規則的	145	112.4±12.2	注意持続・固執	持続的	130	113.8±12.1
	標準	574	108.3±14.0		標準	599	108.4±13.5
	不規則	140	105.9±15.0		非持続的	130	104.4±16.4
接近・退避	接近的	55	108.3±12.6	気の散り易さ	散り易い	124	113.8±11.5
	標準	268	107.5±15.1		普通	599	108.4±13.8
	退避的	536	109.2±13.6		散り難い	136	104.7±15.6
慣れ易さ	慣れ易い	136	109.7±13.3	敏感さ	敏感でない	123	104.4±15.7
	標準	589	108.4±14.2		普通	596	108.6±13.6
	慣れ難い	134	108.4±14.0		敏感	140	112.4±13.2
反応の強さ	弱い	124	101.3±16.1				
	普通	602	108.9±13.2				
	強い	133	113.8±12.8				

表 6-4 4 か月健診時点での気質カテゴリーと言語発達状況 (%)

気質カテゴリー	内 容	遅れ疑い	境界疑い	正常(推定)
周期の規則性 a	規則的	0.7	5.5	93.1
	標準	2.8	11.8	85.4
	不規則	3.6	17.9	78.6
反応の強さ b	弱い	6.5	22.6	71.0
	普通	2.0	10.5	87.4
	強い	1.5	7.5	91.0
注意持続・固執性 c	持続的	0.8	3.8	95.4
	標準	2.0	12.5	85.1
	非持続的	6.9	16.2	76.9
気の散り易さ d	散り易い	0.0	6.5	93.5
	普通	2.2	12.5	85.1
	散り難い	6.6	13.2	80.1
敏感さ e	敏感でない	4.1	18.7	77.2
	普通	2.2	11.9	85.7
	敏感	2.9	5.0	92.1

a : $\chi^2=13.69$, $P < 0.01$, $DF=4$ b : $\chi^2=27.65$, $P < 0.01$, $DF=4$
 c : $\chi^2=23.95$, $P < 0.01$, $DF=4$ d : $\chi^2=17.17$, $P < 0.01$, $DF=4$
 e : $\chi^2=13.65$, $P < 0.01$, $DF=4$

する泣く、笑う等の行動の程度である。「注意の持続性」とは、ある行動をどれだけ長く続けていられるか、ということである。「気の散り易さ」とは、外界からの刺激に対する応答性の容易さをみているもので、ここで言う散り難さは、1つの事柄から他に関心が向かないと言う

意味で、むしろ、固執性に近いものと言える。「敏感さ」は、児の反応を引き起こす刺激の強さであり、周囲に対する児の関心の高さが背景にあると考えられるものである。したがって、「気の散り易さ」と「敏感さ」は、一般的に使用される意味とは、むしろ、望ましさの状況が

逆になっていると言える点に注意が必要である。

さらに、気質カテゴリーと言語発達状況の関連性を見ると、表6-4の5つの気質カテゴリーにおいて、言語発達状況との有意の関連性が認められた。具体的には、言語発達の遅れ疑いが有意に多い群として、「周期が不規則」群、「反応が弱い」群、「注意持続が短い」群、「気が散り難い」群、「敏感でない」群があげられた。

10か月時点、18か月時点での、気質類型と言語発達状況との関連を示したのが表7-1、7-2である。いずれも有意の関連性は認められなかった。一方、5種類の気質類型間で、言語発達状況が境界疑い以下の児の割合は、各健診時点で異なっていた。月齢が上がるに連れ、「手のかかる子」以外では境界疑い以下の児の割合が下がるのに、「手のかかる子」ではそのような傾向が認められなかった。つまり、月齢が高いほど、「手のかかる子」の群で境界疑い以下の児の割合が、他の気質類型と比べて高くなっていた。

考 察

今回、各健診時点でのCareyの質問紙による気質類型と言語発達の間には関連性が認められなかった。一方、月齢が上がるにつれ、「手のかかる子」群で言語発達状況が境界疑い以下の児の割合が高くなる傾向は認めた。この背景としては、次のような可能性が考えられる。

一般に、発達障害を持つ児は、乳児期は、周囲からの働きかけへの反応に乏しく、また、自分からの働きかけも少ないとされている。つまり、乳児期は、ある意味で手のかからない状態にあることが少なくないと思われる。しかし、歩行開始後は、多動性が前面に現れ始め、次第に親にとって目の離せない手のかかる子になっていくことは、日常臨床上、しばしば経験されることである。

さて、各健診時点で、「手のかかる子」と判定された児は、全て同じ児とは限らない。とすれば、言語発達に問題を持つ児の大部分が、4

表7-1 10か月時点での気質類型と言語発達状況 (%)

	遅れ疑い	境界疑い	正常(推定)
手のかかる子	0.0	16.8	83.2
平均的だが手のかかる子	2.2	19.0	78.8
出だしの遅い子	0.0	20.0	80.0
平均的だが育てやすい子	2.8	16.7	80.6
育てやすい子	1.8	13.9	84.3

表7-2 18か月時点での気質類型と言語発達状況 (%)

	遅れ疑い	境界疑い	正常(推定)
手のかかる子	0.0	12.8	87.2
平均的だが手のかかる子	2.1	2.1	95.8
出だしの遅い子	0.0	8.7	91.3
平均的だが育てやすい子	0.0	6.8	93.2
育てやすい子	0.6	2.3	97.1

か月時点では、手のかからない「育て易い子」と判定され、その見達が、月齢が上がるにつれ、特に、歩行開始後の18か月時点では、「手のかかる子」に変化していつている可能性が否定できないであろう。18か月健診での調査が、まだ2/3ほどしか済んでいないため、現時点で証明するような結果を示すことはできないが、データが集計された段階で検討すべき課題としておきたい。

ところで、気質カテゴリーと言語発達の間には、いくつかの有意の関連性を認めたものがあった。気質カテゴリーは、気質類型とは異なり、児の行動を規定する個々の要素と近いものがある。実際、気質カテゴリーとして取り上げられている内容は、発達障害児達の行動特徴に際して使用される用語と極めて類似している。したがって、今回の結果は、気質カテゴリーという用語を用いているものの、要するに、発達障害と関連が深い行動特徴と言語発達との関連性を示しているともみることができよう。とすれば、両者の間にある程度の関連性を認めたのは当然とも言えると思われた。

本研究は、報告書作成時点で、まだ調査途中であり、今後、全てのデータが揃った時点で、経時的な検討を行う予定である。

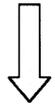
結 語

気質と言語発達の関連性を調査した結果、気質類型と言語発達の間には、有意の関連性は認められなかった。一方、5種類の気質カテゴリー

と言語発達の間には、有意の関連性を認めた。気質カテゴリーが、発達障害と関連の深い行動特徴を反映していることが、その背景と思われた。

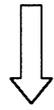
参 考 文 献

- 1) Carey WB, McDevitt SC: Revision of the Infant Temperament Questionnaire. *Pediatrics* 61: 735-739, 1978.
- 2) Thomas A, Chess S: *The Dynamics of Psychological Development*. Bruner/Mazel (New York), 1980. (林雅次監訳: 子供の気質と心理的発達, 星和書店(東京), 1981)
- 3) 佐藤俊昭: 子供の気質の追跡研究—序報— 東北大学教養部紀要43号: 151-171, 1985.
- 4) 原仁, 望月由美子, 山口規容子: 乳幼児の気質. *小児内科* 18: 1033-1038, 1986.
- 5) 佐藤俊昭: 子供の気質の追跡研究—第1報— 仙台とその近郊のゼロ歳児の気質— 東北大学教養部紀要47号: 138-159, 1987.
- 6) Maziade M, Cote R, Boutin P et al.: Temperament and Intellectual Development: A Longitudinal Study From Infancy to Four Years. *Am J Psychiatry* 144: 144-150, 1987.
- 7) 佐藤俊昭: 子供の気質の追跡研究—第2報— 日本語版ITQ-Rとその使用経験— 東北大学教養部紀要49号: 196-175, 1988.
- 8) 長尾圭造, 志野和子, 上好あつ子: 発語前言語発達検査法—その1. テスト内容の概要. *脳と発達* 22: 319-326, 1990.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

気質(temperament)の研究を精力的に進めた Thomas と Chess によると,気質とは,何をするかではなく,どのようにするかという,行動の仕方,行動様式を指す。気質は,養育環境などの環境要因よりも,生来的な生物学的要因の関与が強いとも言われている。

一方,最近の母子関係の研究から,母親と乳児は,新生児を含め,お互いに働きかけと応答を繰り返しながら,相互の関係を作っていくことが知られてきた。

とすれば,児の行動様式に影響を与える気質が,児と周囲の人達との関係に影響を与える可能性が考えられるであろう。また,児の発達は,周囲の人との関係を含めた環境からの影響も受けるものであるので,気質が児の発達に影響を及ぼす可能性も否定できなくなる。

これまで,気質と行動・情緒面の問題との関連を取り上げた研究はみられるが,気質と発達の関連性の研究は少ないように思われる。そこで,本研究は,発達の1指標として言語発達を取り上げ,乳幼児の気質と言語発達の関連性を明らかにしようとするものである。